

比較言語学と比較神話学

その 3

河 崎 靖

序

- I. 日本神話と神話学 (以上、前々回の原稿)
- II. 日本神話と印欧神話 (以上、前回の原稿)
- III. 印欧語比較神話学 (以下、今回の原稿)

III. 印欧語比較神話学

比較言語学が、サンスクリットと古典ギリシア語との比較がいわば一番の基礎になって、インド・ヨーロッパ語というものをある程度まで復元できるくらいの成果を上げたように、それと同様に、神話に関しても、インドとギリシアに最も豊富に古代の神話が残っているのであるから、インドとギリシアの神話を、ちょうど比較言語学者がサンスクリットと古典ギリシア語を対象にして行ったようにして比較すれば、インド・ヨーロッパ語族のもっていた共通の神話を復元できるという方法論をうちたてんとしたのは自然なことである。印欧語に関する比較言語学的手法が進展するに伴い、インドとヨーロッパの関係が注目されるようになり、インド・ヨーロッパ語族という分類が誕生したのは 19 世紀後半である。そして、デュメジル G. Dumézil が比較言語学のアプローチに基づき比較神話学を確立させたのが 20 世紀前半である。そもそも、18 世紀以前から、アメリカ大陸より伝えられる新しい神話を比較しようとする試みもまた、構造主義言語学の発展動向と類似している

と言える。レヴィ・ストロースが世界のさまざまな神話に目を向け、構造主義的神話学の著『神話論』（1964-1971）を発表したのは私たちの記憶に新しい¹⁹⁾。

本稿は、言語学・神話学おのおの方法論に関し検討することを通して、これらの学問領域のありようについて考察することを目指す。すなわち、言語学のモデルを基盤において、神話学で採られているアプローチのあり方と比較し、言語学・神話学に適う一貫した原理に関し考究してみることがこの小論の狙いである。

3-1. 比較神話学史

古より伝えられてきた神話は、人類の精神史とも言えよう。文明発祥の頃から神話は人類とともにあり、その元は古代の人が自然の動きや天変地異を自分なりに解釈して語り継ごうとしたものなのかもしれない²⁰⁾。マックス・ミュラー Max Müller (1823-1900) は、世界各地の神話の神々（特に最高神や主神）が天体や自然現象を司ることから、天体の動きの反映が神話であると考へた。この意味において、ミュラーは比較神話学の先駆者と呼んでいい²¹⁾。彼は、原人類は抽象的な概念を表現する言語をもっていなかったので、天体現象から受ける畏敬や畏怖の念を人格的な表現でもって表わしたのだとし、これが後に本来の意味が忘れられ人格的な存在が登場する神話になったのだと説く。ミュラーは、神話のすべては自然現象にあると主張した。比較言語学の手法を用い、最古の資料と言われている『ヴェーダ神話』を中心に神々の名前の比較を行うことから、彼は神話を扱い始めた。ミュラーの信条ともなっている「すべての神話は太古の人類が太陽の運行に対して感じた驚きから生まれた」とする自然神話学説（もしくは太陽神話学説）は、インドとギリシア両地域の神話伝承を比較検討することで、インド・ヨーロッパ語族の精神文化を知ることができると想定に基づいている。

比較神話学の創始者ミュラー Müller がイギリスで活躍していたのと同じ頃、ドイツでは、グリム兄弟 Brüder Grimm を代表とする、ロマン派の影響を受けた新しい比較神話学の動きが始まっていた。兄ヤーコブ Jacob と弟ヴィルヘルム Wilhelm が共同で『グリム童話』(1812-1815)・『ドイツ伝説』(1816-1818)を著しているが、これもやはり、ロマン派の「民族の魂」を明らかにしようとする動きの一つであると考えられる。その後、兄ヤーコブは単著で『ドイツ神話』(1835)を刊行する。その中で彼はドイツ以外のインド・ヨーロッパ地域の神話にたくさん言及している⁴⁾。その際、ヤーコブは神話とその他の物語形式の間にはどのような関連があるのかを考察しようとした。基本的に彼は神話が伝説や昔話に変容していくという立場をとっており、ゲルマン民族には北欧を除けばギリシア神話に相当するような神話群が見当たらないその理由も、古代のゲルマン神話が昔話や伝説に姿を変えていったからだと説明している⁵⁾。

20世紀後半、エリアーデらにより、世界中の神話をほぼ均等の比重で論じる気運が高まってくる⁶⁾。日本でも、印欧神話と日本神話との間に構造的類似が見られる(アマテラス・スサノヲ・オホクニヌシの3神の役割等で)という考え方は⁷⁾、研究者の間で根強く信じられている。これには、イラン系の遊牧スキタイ人が東進してアルタイ語系の遊牧民と交流し、印欧語圏の三機能体系の神話伝承を伝え、それが朝鮮半島に伝わり、さらに朝鮮半島からの帰化人集団の手で古墳時代の和朝廷に持ち込まれ、彼らが作成に携わった『記紀』神話にその骨組みとして採り入れたという経緯が、その前提として想定されている⁸⁾。

20世紀を代表する神話学者と言えるのが民俗学者レヴィ・ストロースである。彼は、まず言語学者として音韻構造の分析を手がけ、その後、民俗学者として同様の構造分析を行えないかと始めたのが神話の体系化であった。彼は、神や英雄など個別の名前や役割よりもむしろ、神々や登場人物たちの

関係から導かれる体系性を重視する。このような、自然に存在する諸事象を分類し体系化・構造化することによって世界を理解しようとする思考をレヴィ・ストロースは神話的思考と名付けた。20世紀を代表するもう1人の神話学者はミルチア・エリアーデである。彼は、歴史主義のもとに発展した唯一神への信仰ではなく、さまざまな神々が存在する神話の世界が宗教の代わりとなると考えた。エリアーデは、すべての神話は何らかの始まりを説明する起源神話であるべきであり、神話とは存在を基礎付ける模範的な典型例であると主張したのである⁹⁾。

ここまで言語学に基づく神話学の系統を概観したが、神話学の代表的な流れを大まかにまとめてみると、神話学は、

比較言語学 → 文化人類学 → 構造言語学 (→ 精神分析)

という言語学の軌跡を並行的に辿ってきたようである。併せて、さまざまな学問分野と連携してきた証しとして、神話学が対象とした領域が次のように変遷していることが指摘されよう。

自然現象 → 文化現象 → 人間社会 (→ 人間心理)¹⁰⁾

3-2. 印欧語圏の神話をめぐって

ここでは、印欧語圏を中心に創造神話等をめぐってその成り立ちについて考察する。と言うのは、どの神話にとっても創造の物語は欠くことのできない要素と考えられるからである。印欧神話の1つ、ギリシア神話は、聖書と並ぶヨーロッパ精神の源流である。ギリシア神話における創造物語の詳細にはここでは触れないが、その概要はおよそ次のようなものである。

初めに無の空間の中にカオス（混沌）が生まれた。次いでそのカオスの中から大地ガイア・地底の世界タルタロス・愛エロスが誕生した。また、カオスから闇エレボス・夜ニュクスが生じた。闇のエレボスと夜のニュクスが交わり、光の神アイテル・昼ヘメラが生まれた。さて、大地ガイアは天ウラノスと海ポントスを生んだ。ウラノスは全世界を支配し、ガイアと交わり3人の巨人ヘカントケイル（100の手と50の頭を持つ怪物）・3人のキュブクロス（額に1つの目をもつ巨人）をもうけた。ウラノスは彼らを嫌い、地底の世界タルタロスへ投げ込んだ。その後、ウラノスとガイアの間、ティターン神と呼ばれる男女合わせ12人の神々が生まれた。長兄はオケアノスで末弟はクロノスである¹¹⁾。クロノスは、ガイアと交わろうと降りてきたウラノスの男根を切り取り海に投げ込む¹²⁾。こうして、全世界の支配権はウラノスからクロノスに移る。クロノスはレアと交わり、火の女神ヘスティア・豊穡の女神デメテル・女王ヘラ・冥府の神ハデス・海王ポセイドン・全能神ゼウスを生む。

ところで、シュリーマンによるトロイア発掘をもちだすまでもなく、ギリシアの神話・英雄伝説にはそれに先行する時代のさまざまな歴史的事実の記憶が一部は誇張・脚色されながらも何らかの形で反映しており、昔話・物語が全くの虚構ではないことが証明される。トロイアの例で言えば、英雄たちの活躍の場が古くミケーネ時代に栄えた都市とよく一致するという事実が挙げられる¹³⁾。英雄が誕生する背景として考えられるのは、元々さまざまな地方で語られていた、いろいろな武勇伝・怪物退治などの話がやがてまとめ上げられ統一に向かい、普通の人間を超えた神に近い存在としての主人公が生まみ出されていくというプロセスである¹⁴⁾。いったん、このような存在が成立すると、それまで地域的に分散していた武勇の物語がすべて少数の英雄のもとに集約される¹⁵⁾。ギリシア神話では、英雄とは半神（ヘーミテオス）とも言い換えられる通り、通常は神と人間の通婚によって生まれた存在で、普通の人間よりはるかに優れていると考えられる過去の勇士のことである¹⁶⁾。た

だ、ギリシア神話に登場する神々・英雄は、確かに人間の傲慢さを厳しく審判する存在ではあるが、それと同時に、欲望・嫉妬など人間がもちそうな、この世的な感情を示すいたって人間的な性格の持ち主として描かれている。ある意味、ギリシア神話は他の神話群に比べて倫理的規範という性格が希薄であると言えよう¹⁷⁾。

歴史的に見ると、ミケーネ時代のギリシア人（アカイア人）は、前2000年頃から前1900年頃にかけて、バルカン半島南部のギリシアの地に移住し、この地にインド・ヨーロッパ語族の社会制度・宗教などをもたらしたと考えられる。当時、より栄えていたクレタ（ミノア）文明と接し、ギリシア人は、この非インド・ヨーロッパ系の文化を積極的に取り入れ、両文化の要素を融合し独自の文化を発展させた（ミケーネ文化：前17世紀—前12世紀）¹⁸⁾。ミケーネ時代は、ギリシアが地中海の各地と活発な交渉をもった時期であった。

時代が下って、ギリシア神話の時代ともなると、神託の地デルフィがいわば世界の中心とみなされるようになっていた。実際、デルフィにおける人々の居住は、考古学的な証拠から見てミケーネ時代に遡ることが確かめられている。具体的には、デルフィの主神域であるアポロンの神域の東側にあるアテナ・プロナイアの神域から、女神をかたどったミケーネ時代後期の土偶が大量に出土しており、デルフィはこの時期にギリシア圏を代表する何らかの神域としての機能を果たしていたと考えられる¹⁹⁾。ずっと後、キリスト教が浸透していき、いわば異教徒皇帝のユリアヌス（在位361—363年）が仰いだ神託が、デルフィの最後の神託となる。その後まもなく、4世紀末にテオドシウス帝によって異教が全面的に禁止されるに及んで、長い歴史を誇ったアポロンの神託の地デルフィは、その幕を下ろすことになった²⁰⁾。

3-3. 言語学・神話学・神学

キリスト教は伝える：天上から天使が舞い降り、羊飼いたちにキリストの再誕を知らせた時、ギリシア全島に深いうめき声が響きわたった。オリュンポスの神々は、その座より放逐され、神々の一部は深い暗黒の世界へと逃れた。そして全能にして偉大なるパン（半獣神）は死んだと。

ギリシアの地にキリスト教が布教され伝播していくさまを見るには、パウロの伝道旅行に関する記述に頼ることになる。パウロは古代ローマの属州キリキアの州都タルソス（今のトルコ中南部メルスィン県のタルスス）生まれのユダヤ人で、職業はテント職人で（「使徒行伝」18：3）生まれつきのローマ市民権保持者でもあった（「使徒行伝」22：25-29）。もともとファリサイ派に属しエルサレムで高名なガマリエル1世（ファリサイ派の著名な学者ヒレルの孫）のもとで学んだ。パウロはそこでキリスト教徒たちと出会う。熱心なユダヤ教徒の立場から、初めはキリスト教徒を迫害する側についていたが、ダマスコへの途上において、復活したイエス・キリストに出会うという体験をする。いったん目が見えなくなったが、アナニアというキリスト教徒が神のお告げによってパウロのために祈ると再び目が見えるようになった。こうしてパウロはキリスト教徒となった（「使徒行伝」9章）。この経験は「パウロの回心」といわれ、紀元34年頃のこととされている。その後、使徒たちに受け入れられるまでに、ユダヤ人たちから何度も命を狙われたが、やがてアンティオキアを拠点として小アジア・マケドニアなどローマ帝国領内へ赴き、会堂（シナゴグ）を拠点にしながらバルナバやテモテ・マルコといった弟子や協力者と共に布教活動をおこなった（特に異邦人に伝道したことが重要である）。「使徒行伝」によれば、3回の伝道旅行を行ったのちエルサレムで捕縛され裁判のためローマに送られたとのことである。伝承によれば皇帝ネロのとき60年代後半にローマで殉教したとされるが、このこと

の史実性は確かではない。なお、パウロの著作として『新約聖書』の中、「ローマ人への手紙」・「コリント人への手紙」・「ガラテヤ人への手紙」・「フィリピン人への手紙」・「テサロニケ人への第一の手紙」等がある（「コロサイ人への手紙」がパウロの真正書簡であるかどうかは議論があり、「エフェソ人への手紙」およびいわゆる牧会書簡はパウロを擬してパウロの死後書かれたとする見方が今日では一般的である）。

パウルら初期のキリスト教徒のキリスト信仰に神話というレッテルを貼るという意味で「非神話化 Entmythologisierung」という術語を使ったのは、R・ブルトマン（1941）„Neues Testament und Mythologie“ という論文である。神学の世界に神話というタームを用いたのである。そもそも神学は理性によっては演繹不可能な信仰の保持および神の存在を前提とする（またイエス・キリストへの信仰を前提とするという点で宗教学と異なる）。つまり、神話の多くは神の誕生に言及するのであるが、神の存在を前提とした創造神話こそが聖書の特徴と言える²¹⁾。聖書は紀元前 1400 年来、神の啓示により書き続けられたもので、今日あるテキストのうち最も研究し尽くされてきた書物ではある。とは言え、神がどういう存在かを知る最も有効な手だてはやはり聖書をよく読むこと以外にはない（加藤 1999：299）。

いずれにせよ、初期キリスト教の宗教的ドグマがそのままでは現代には通用しない。こうした古代的なものをそのまま信じていると思っている現代人は、実は初期のキリスト教徒とは随分と違ったことを信じ込むこととなっている。パウル等のキリスト信仰を「神話」と呼ぶとすると、神話をどう定義するかの問題でもあるけれども、およそ古代の宗教思想はすべて神話の類に入ってしまうことになるであろう²²⁾。中世初期、キリスト教は比較的、異教に対して寛容で、現地の神話・物語の類を利用して信仰を浸透させようとしていった傾向がある。しかしながら逆に、キリスト教徒のもつ神話（聖書）と相反する部分は徹底的に書き換えが行われる。その結果、例えばケルト神

話には創世記と言える部分が存在しなくなった。ただし、その痕跡を注意深く見てみると、現世と平行して存在する異界の存在を感じることができる。神話の中で常世の国として表現されている世界がある。地の底や海の果てにあるとされるそれらの世界は妖精王と呼ばれる存在によって統治される。他の存在によりこの世を追われたケルトの神々はこの常世の国を自らの住居とするのである。現代でも妖精という目に見えない存在のエピソードは豊富である。ケルト人が神話の中に登場する存在を変化させつつも、信じ、身近な、簡単に現世に関与できる世界の存在を確信していたと考えられる。

注

- 1) この書は、各神話間の関係性を調べたもので、1400もの神話が紹介・分析されている。
- 2) 参照 HP : <http://www.mirai.ne.jp/~panther/myth/myth00.html>。
- 3) HP : <http://www.h4.dion.ne.jp/~kotozuki/mythhistory.htm> を参照のこと。ミューラーに代表される自然神話学派が果たした貢献とは、印欧語族という1語族に共通の神話を復原しようと試みたことである。これは、その後、印欧語族以外の諸語族についても、ある語族に共通の神話を復原しようという試みの先駆けになった点において高く評価されるべきである（大林 1966 : 16）。片や、Schmidt (1930) のように、この学派は印欧語族以前の宗教や神話が印欧諸族の神話中に残存している事実にはほとんど注意を向けなかった点などが指摘される。
- 4) 吉田・松村 (1992 : 208)
- 5) この考え方に対し、昔話や伝説は神話の残存ではなく、むしろ神話の誕生の土壌であるとなす説もある。妖精や小人など小さな存在への信仰からこそ大神は生まれるはずだとする見方である。
- 6) これは、「近代的神話学」の登場とも言われる。エリアーデ (1907-1986) の『世界宗教史』で展開される神々誕生の物語は、現在でも多くの民俗学書に

引用されている。それ以前は、主にインド（よく使われた資料は『リグ・ヴェーダ』）とヨーロッパの神話の比較論が盛んであった。

- 7) 大林（1984）『東アジアの王権神話 — 日本・朝鮮・琉球』、吉田（1974）『日本神話と印欧神話』、吉田（1976）『日本神話の源流』など。
- 8) 松村（2000：26-33）。
- 9) 参照 HP：<http://www.h4.dion.ne.jp/~kotozuki/mythhistory.htm>。
- 10) 参照 HP：<http://www.h4.dion.ne.jp/~kotozuki/mythhistory.htm>。
- 11) 『古事記』の中の大国主命のように、兄弟の末っ子が勝利するという神話の型は世界に多く見られる。
- 12) 海に捨てられた男根から出た精液の泡から愛と美の女神アフロディーテ（ビーナス）が誕生する。
- 13) 中村・中務（1998：70-71）。
- 14) 松島・岡部（2002：8）。
- 15) 『イリアス』・『オデュッセイア』は、ホメロスというただ一人の詩人によって創作されたものではなく、その背後に、かなり長期にわたる神話や伝説の伝統があったのではないかと推察される（松島（2004：11））。
- 16) 中村・中務（1998：70）。
- 17) 松島（2004：6-7）。なお、神話には一定の決まったテキストがあったわけではなく、その内容が時代や場所によって異なる口承口伝の形態をとっていた。
- 18) 松島（2004：8-9）。
- 19) 周藤・澤田（2004：124）。
- 20) 周藤・澤田（2004：129）。古代ギリシアが繁栄した時期よりも、はるかに長いその後の時代において、古代の遺跡が忘れ去られたり破壊されたりしたプロセスに、ギリシアがたどってきた長い歴史の歩みを実感することができる（周藤・澤田 2004：4）。
- 21) 聖書の天地創造の物語は次のようである。『初めに神が天地を創られた。地は形がなく、そこには何もなかった。闇が大いなる水の上にあった。そのとき、神が「光、あれ」と言われると、光ができた。神は光を見、それを善しとされた。そして、光と闇を区別された。光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。こうして、夕があり、朝が来た。創造の第1日である。（中略）神が天と地をつくられたとき、地には一本の木もなく、野の草もなかった。神が雨を降らせ

ず、土地を耕す人もいなかったからである。ただ、霧があり、地の全面を潤していた。神は、地のちりて人を形造り、いのちの息を吹き込まれると、人は生き物となった。神は、東の方のエデンに園を設け、そこに人を置かれた。神はその地に見るに良く食べるに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、善悪の知識の木を生えさせた。神は人をその園に置き、耕させ、守らせた。神は人に命じられた。『この園のどの木からも、思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは食べてはならない。それを食べるとあなたは死ぬであろう。』その後、神は言われた。「人が一人でいるのは良くない。彼のためふさわしい助け手を造ろう。」神は、人にすべての生き物を見せたが、彼の助け手は見当たらなかった。そこで神は、人を深く眠らせ、そのあばら骨のひとつを取った。神はそのあばら骨からひとりの女を造り、人のところに連れてこられた。人は女を見て気に入り、自分の助け手とした。このとき、人もその妻も裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。』

- 22) ケルト神話は6世紀以後のキリスト教の流入によって、もともと口承文学として語り継がれてきたケルトの民話・神話が明文化されたものである。確かに、現在に残るケルトの神話は、キリスト教というフィルターを通してのため、ケルト独自のものとは必ずしも言えない部分がある。ただ、キリスト教が布教される中で、土着の神話がうまく利用されたケースで、他の地域と比べてその原型がよく残っていると言えよう。

参考文献

- 上山春平 (1975) 『続・神々の体系』中央公論社
 梅原 猛 (1985) 『神々の流鼠』集英社文庫
 大林太良 (1966) 『神話学入門』中公新書
 加藤隆 (1999) 『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』大修館書店
 周藤芳幸・村田奈々子 (2000) 『ギリシアを知る事典』東京堂出版
 周藤芳幸・澤田典子 (2004) 『古代ギリシア遺跡事典』東京堂出版
 中村善也・中務哲郎 (2019) 『ギリシア神話』岩波ジュニア新書
 松島道也 (2004) 『図説ギリシア神話「神々の世界」篇』河出書房新社
 松島道也・岡部紘三 (2002) 『図説ギリシア神話「英雄たちの世界」篇』河出

書房新社

松村一男（1999）『神話学講義』角川書店

松村一男（2000）「神話に民族の分岐を見る — デュメジル流の比較神話学的観点から」『言語』（大修館）12月号、26-33頁。

吉田敦彦（1975）『比較神話学の現在』朝日出版社

吉田敦彦・松村一男（1992）『神話学とは何か』有斐閣新書

Schmidt, W. (1930) *Handbuch der vergleichenden Religionsgeschichte*. Münster : Aschenforffschen